

2022年5月18日

NHK広報局

## 5月メディア総局長定例記者会見要旨

### 【林メディア総局長挨拶】

メディア総局長になりました、林理恵です。以前、放送総局の一理事として総局で仕事をしておりまして、1年半ぶりに総局に戻って来て、本当に大きく動いていることを実感しています。中期経営計画のもとで、新しいNHKらしさを求めて、まさにその2年目の実行フェーズに入っているということ、具体的には、放送にとどまらず、デジタル、リアルイベント含めて、トータルとして、視聴者の皆様との新しい関係を築くということ、これに向かってみんな頑張っているということです。放送総局がメディア総局に生まれ変わったのも、その一環です。この4月の番組改定で、総合とEテレをあわせて40%を超える衣がえを致しました。マーケティング機能も強化されました。毎日寄せられる多くの声、そして情報を分析して、そこから必要であれば迅速に見直しにつなげていく。着任してから3週間、猛スピードで動いていることを実感しています。変わったということはゴールではなくて、正にここからがスタートだと考えています。さまざまなチャレンジを続けて、一人でも多くの視聴者の皆様にNHKに触れていただき、信頼していただき、そして必要だと思っただきたい。そのコンテンツ・サービスを発信するフロントラインの総局長の立場として、身が引き締まる思いでありますし、緊張感でいっぱいです。NHKの現場には、優秀な仲間たちがたくさんいます。私は、この仲間たちを心から信頼しています。メディアを取り巻く環境が本当に大変な勢いで変わっていることも痛感しておりますので、試行錯誤も繰り返しつつ、公共メディアの役割、そして一方で今の時代に即したニーズも踏まえつつ、正確、公平公正なニュース、情報、多彩で質の高いコンテンツ、より良いサービスを視聴者の皆様にお届けできるよう、メディア総局一丸となって力を尽くしていきたいと思っています。それから、今日ここにいらしている記者の皆さんも、媒体は違いますが同じメディアの仲間として、ぜひ叱咤激励をいただきつつ、皆さんと一緒に、メディア全体を今よりさらに一層良いものにしていければと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

### 【熊埜御堂メディア戦略本部長挨拶】

熊埜御堂です。メディア総局統括補佐とメディア戦略本部長を兼務します。もともとは番組のディレクターで、教育福祉教養系の番組を制作してきました。数年前はEテレの編集長、去年は当時の編成局長という立場で改革を仲間とともに推進してきました。いま一番大事なのは、強いコンテンツを核として、放送、デジタル、私たちがリアルと呼ぶイベント等の視聴者とのコミュニケーションの場を通し、ひとりでも多くの方にNHKのコンテンツやサービスに接していただくことです。これまでと同じやり方では通用しなくなったという危機感をバネに、さまざまなチャレンジを継続し、おもしろい、役に立つと思ってもらえるものを届け、視聴者との信頼関係を改めて築いていきたいです。

### 【山内メディア戦略副本部長挨拶】

山内です。よろしくお願い致します。2年前まで(当時の)編成局の計画管理部長を3年間務め、メディアのみなさまから厳しい質問を受けました。今後もきちんと向き合っていきたいと思っていますので、よろしくお願い致します。

## (1) 新たな手法による大型番組 (林メディア総局長)

最初に、新たな取材手法で制作した大型番組を2本ご紹介する。

資料の1枚目は、双方向サイト「みんなでプラス」に寄せられた声を基に制作した、NHKスペシャル「性暴力 “わたし” を生きるために」。NHKでは、環境、格差、ジェンダーなど社会のさまざまなテーマについて考える双方向サイト「みんなでプラス」を2019年に立ち上げた。このサイトには、現在、およそ20のテーマがある。そのうちの1つが「性暴力を考える」だ。立ち上げた3年前は、性暴力をめぐる裁判で無罪判決が相次いでいた。毎日のように寄せられる声に向き合いながら、被害の事例、心身への影響、対処方法等について発信し、それを読んだ方々からさらに寄せられる声に、耳を傾けてきた。こうした取り組みを積み重ね、今回、NHKスペシャル「性暴力 “わたし” を生きるために」を放送する。被害を受けた方々は、口々に「わたしを失った」と語る。当たり前の日常を奪われ、社会と断絶し、“わたし”という1人の人間として生きていけなくなり、さらに、その後の苦しみは、パートナーや親などをも巻き込んでいく。どうすれば、再び“わたし”を生きることができるのか。私たちの社会に何ができるのか考える。

資料の2枚目は、新しい調査報道による大型番組だ。NHKでは、OSINT（オシント）と言われる、オープンソース調査を活用した調査報道に取り組んでいる。これは、インターネットで誰もがアクセスできる公開情報や、衛星画像、SNSで発信された動画や写真などを解析することで事実を迫る調査報道の手法だ。この手法を使い、これまで多くのNHKスペシャルを制作してきた。中でも、去年2月のクーデター以降、ミャンマー情勢を取り上げた3本のNHKスペシャルでは、軍による弾圧や攻撃の実態などを明らかにした。現在、制作を進めているNHKスペシャル「追跡 “海底資源ウォーズ” ～地球最後のフロンティアで何が～」でも、OSINTの手法を活用している。資源をめぐる世界の獲得競争が海底にまで広がる中、中国が所有する海洋調査船などの航跡情報を分析。衛星画像のデータや現地取材を組み合わせることで、これまで断片的にしか見えなかった動きの詳細を明らかにしようとしている。

NHKは今後も、情報収集の新しい手法の開発に取り組みながら、丁寧な取材を積み重ね、真実に迫るコンテンツをお届けしたいと考えている。

(詳細は報道資料を参照)

## (2) NHKホール 番組公開再開 (熊埜御堂メディア戦略本部長)

耐震工事のため休館していた「NHKホール」について、6月に工事が完了し、7月より番組の公開を再開することになった。本日から一部の番組で観覧募集を行うのでお知らせする。「うたコン」や、「おかあさんといっしょ」のキャストによるファミリーコンサートなど、おなじみの番組やイベントがNHKホールに帰ってくる。そして、今年で3回目となる大型音楽特番「ライブ・エール」は、これまで無観客での開催だったが、今回初めてNHKホールにお客様を迎えてお届けできることになった。NHKホールは、49年前に、放送番組を多くの視聴者の皆様にご参加いただいて作り上げていくために建設された。今回の改修工事を終えて、引き続き視聴者の皆様リアルな感動をご提供できればと思っている。7月から8月の主な番組・公演については、お配りした資料をご覧ください。多彩な番組やイベントの詳細について、各担当者からご説明する。

(以下、担当者)

まずは「特集番組の公開」について。7月5日火曜日、1年4ヶ月ぶりにNHKホールからお届けする「うたコン」生放送は、夜7時30分からの72分・拡大版だ。さらに8月6日土曜日は「ライブ・エール2022」を、午後6時5分から6時45分、そして夜7時30分から8時50分にわたって、NHKホールから生放送する。アーティストの皆さんによるすばらしい「音楽のエール」に、どうぞご期待いただきたい。

次に「番組の公開」について。7月11日月曜日、リサイタル番組「リサイタル・パッショ」の公開収録を行う。NHKホールの象徴でもあり、1973年にホールが開館した時のこけら落とし公演の主役でもあったパイプオルガンの魅力を、たっぷりとお届けする。

続いて「公演・イベント」について。「おかあさんといっしょファミリーコンサート」は、4月から新しく登場したキャラクターの「ファンターネ！」の仲間たちと、第2代目の歌のおねえさん、ながた・まやさんが、初めて出演するコンサートになる。また「NHK杯全国高校放送コンテスト」について

も、コロナ禍によるコンテストの中止やオンライン配信による開催を経て、3年ぶりに生徒たちがNHKホールに集まっての開催となる。全国の高校の放送部の皆さんに、日頃の校内放送活動の成果を存分に発揮していただきたいと思う。NHK交響楽団も、ホームグラウンドのNHKホールに戻ってくる。7月には2つの特別公演を予定している。それぞれの公演やイベントは、現時点では放送日が決まっていないうものが多いが、放送でもお楽しみいただける。番組観覧やイベントの応募方法など詳細は、決まり次第、NHKまたはNHK交響楽団のホームページに掲載していく。

(詳細は報道資料を参照)

### (3) 大河ドラマ トピックス

#### 【「鎌倉殿の13人」見どころについて】 (熊埜御堂メディア戦略本部長)

前作の「青天を衝け」と比べると、今回の大河ドラマの総合視聴率に大きな変化はないが、男女40代から50代に比較的好く見られているのが特徴だ。また、NHKプラスでの視聴に関しては、加入者数が日々増えているので、昨年度と単純な比較はできないが、前作と比べると約3倍の視聴数で推移している。関連番組もよくご覧いただいております、5月3日「プロフェッショナル仕事の流儀」で小栗旬さんのスペシャルを放送した。毎週水曜放送「歴史探偵」での源義経や壇の浦の戦いの回などは、NHKプラスでもよく視聴された。視聴者の皆様が、ドラマのストーリー展開にあわせ関連番組もお楽しみいただいているとたいへん嬉しく思っている。先日の放送では、物語前半の山場だった「源平合戦」に勝利し、源頼朝が主人公・義時らとともに、念願だった打倒・平家を果たした。しかし、15日の放送では、頼朝と、天下取りに貢献した弟・義経が完全に決裂。この先、源氏一族はどのような運命をたどるのか。次の日曜日に放送する第20回「帰ってきた義経」では、義経が奥州に逃れ、その才能を恐れる頼朝が義経を討つよう命じる。小栗旬さん演じる義時はその命令にどうこたえるのか、ご注目いただければと思う。そして、いよいよ物語は中盤へと入っていく。「鎌倉殿の13人」の制作統括から、これからの見どころ等について説明させていただく。

(以下、担当者)

これから先、源平合戦が一段落したが、この先も引き続き、先の読めない展開となる。源氏一族や頼朝本人の運命が狂い始めていく、その中で、御家人同士の権力争いが始まる。その中心にあって、北条義時がこの混乱にどのように立ち向かっていくのか。その中で、何度も彼は重大な決断を迫られていくという物語になる。さらに、新しい世代のキャストが続々登場する。中でも、坂口健太郎さん演じる義時の息子、北条泰時、そして二代将軍、源頼家がいよいよ登場する。金子大地さんに演じていただくが、その他、資料にある面々が続々これから登場してくるので、ますますドラマは盛り上がっていくと思う。三谷幸喜さんが、それぞれのキャラクターを魅力的に描いてくださっているので、ぜひ、予測不能のエンターテインメントということでご覧いただければと思う。

#### 【「義経のスマホ」について】 (熊埜御堂メディア戦略本部長)

大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、菅田将暉さん演じる義経の大活躍が描かれたが、こちらの義経にも、ぜひご注目いただきたい。「義経のスマホ」だ。「もしも歴史上の偉人がスマホを持っていたら？」という設定のもと、「クスッ」と笑える小ネタが満載のショートストーリーの第3弾だ。

第1弾の明智光秀では、山田孝之さんが、第2弾の土方歳三では窪田正孝さんが主役を演じてくださったが、今回も実力派俳優が、源義経を肩の力を抜いて熱演してくれている。主演が誰かということについては、放送まで楽しみにしていただければと思う。

また、ドラマの放送に先駆けて、Twitterのアカウント「スマホを持つ源義経」を開設している。義経が自分の活躍を取り上げたネットニュースをアップしたり、平家や御家人の悪口をツイートしたりと、こちらもドラマとあわせて突っ込みどころ満載だ。義経がスマホを持つことで、果たして歴史が変わるのか。現在、NHKプラスでご覧いただける「光秀のスマホ」とあわせてご覧いただければと思う。

(詳細は報道資料を参照)

#### (4) ウクライナ情勢 放送予定 (山内メディア戦略副本部長)

ウクライナ番組の関連についてご説明させていただく。ロシア軍によるウクライナへの侵攻の最新情報を伝えるため、現在も新年度の編成を一部変更してお伝えしている。現時点で予定している主な番組についてまとめたので、資料をご覧ください。まず「ハートネットTV」では、ウクライナに暮らす、ろう者の実態について伝える。現地では、テレビの緊急ニュースに手話通訳や字幕が入らず、耳が聞こえないろう者の方は、爆撃が起きていることに気付かないといった命に関わる深刻な事態が起きている。番組では、遠隔インタビューや自撮り映像などを活用して、情報弱者と呼ばれる人たちが、今、どのような危険にさらされているのかについて緊急報告する。さらに、2009年に放送した「NHKスペシャル〜揺れる大国 プーチンのロシア」の4回シリーズを一挙アンコール放送する。プーチン大統領の現在につながる思考の深層が垣間見えるシリーズとなっている。6月19日には、デジタル時代の戦闘の実態を伝える番組をBS1で放送する。今回の軍事侵攻は、衛星の画像やSNSなどの情報を通じてリアルタイムで戦況を知ることができる、かつてない情報戦となっている。ロシアの圧倒的な軍事力を前に、ウクライナや支援する国々がいかに情報を活用しながら対抗しているのか、その実態と課題に迫る。国際放送のNHKワールドJAPANでも、ニュースのほかさまざまな番組でお伝えしている。今後の主な予定を資料に記載しているのでご覧ください。6月4日には、世界の識者による討論番組を予定している。日本や欧米の情報セキュリティや安全保障の専門家にご出演いただき、21世紀型情報戦ともいえるウクライナ侵攻の現状と今後の見通しに迫る。また定時番組「Sharing the Future」では、各地での避難民支援活動についてもお伝えしている。

(詳細は報道資料を参照)

#### (5) 陸上中継での接触事故について (林メディア総局長)

今回の接触事故に関しては、スポーツ中継を担当する放送局としてあってはならないことで、極めて重く受け止めている。けがをされた選手ご本人はじめ、関係する皆様に深くお詫び申し上げる。今回の事故の原因をしっかりと検証し、スポーツ中継に携わるすべてのスタッフに再発防止の取り組みを徹底していく。事故の状況、再発防止に向けた取り組みについて、担当から説明申し上げます。

(以下、担当者)

これまでの調査で分かった事故の状況と原因、再発防止に向けた取り組みについて説明する。報道資料をご覧ください。

初めに1. の概要。事故は、5月7日土曜日、午後8時50分ごろ、BS1で中継していた男子1万メートルの男子2組目のレースで起きた。1位の選手がゴールするのを、第1コーナーの内側から撮影していたワイヤレスカメラ担当のカメラマンが、安全を十分確認しないまま、トラックを横断しようとした。このカメラマンは、送信機を背負った補助スタッフと二人一組で撮影していたが、カメラマンが安全を十分確認せず、また補助スタッフに声をかけずに横断を始めたため、カメラと送信機をつなぐケーブルが後ろから来た選手の進路を塞ぐ形になり、頸部に接触して負傷させる事故となった。さらに後ろから来た4人の選手にも、進路の変更、或いは減速を強いることになった。カメラマンは、本来ならここで速やかに撮影を止め、選手のけがの確認や謝罪、大会主催者やNHKの現場責任者に報告すべきだったが、接触後に選手が走り出したため、大丈夫と思い込み、撮影を続けた。技術の責任者に接触の事実を伝えたのは放送終了後だった。次に2. の原因。このカメラマンは、競技中にトラックを横断した経験がなかった。本来なら、現場責任者であるチーフ・プロデューサーやディレクターが、放送前の打合せ等で、横断するタイミングや横断の方法について具体的に説明するべきだった。しかし、「安全に注意して撮影や移動をしてほしい」と言っただけで、安全に対する指示が不十分だった。ここで、「横断するタイミング」について補足説明する。安全を確認するには、十分な時間的余裕が必要。現場責任者は、1位の選手がゴールに戻ってくる数周前には、カメラマンがトラックの外に出ていると思込んでいた。しかし、先ほどご説明したとおり、具体的な指示は出していない。カメラマンは、結果的に、1位の選手がゴールするまでフィールドの内側にいた。そして、その後トラックを渡ろうとした。もう1つ、安全に横断するポイントは「横断の方法」。通常は、まずカメラを肩から降ろして手で持ち、左右の視界を確保した上で、後続の走者との間に十分な距離があることをカメラマンだけではなく補助スタッフを含めて複眼的に確認し、タイミングを計って横断する。こちらについても、現場の責任者はカメラマンに、こうした具体的な指示をしていなかった。当該カメラマンは、横断のタイミングが遅れて

時間的な余裕がなくなり、肩にカメラを担いだまま横断しようとしたため、十分な安全確認を怠った。現場の責任者の安全に関する指示が不十分だった。

再発防止のための取り組みについて。この度の事故から、スポーツ中継の職業倫理が現場に徹底していなかったこと、さらに、現場のリスクに対する責任者間での安全管理、危機管理の意識づけが不十分だったことが明らかになった。このため、次に述べる4項目の再発防止策を行うことにする。1つ目が、スポーツ中継に携わる職業倫理を明文化した上で、安全管理、危機管理のマニュアルを作成すること。2つ目が、ワイヤレスカメラなど、競技者に近い所でリスクを伴う機材を使う中継では、大会ごとに「リスクチェックシート」を作って事前に対応を検討し、必要に応じて要員を増やすなどの対応を強化すること。3つ目が、こうしたマニュアルとチェックシートを現場に定着させるための研修。そして4つ目が、主催者との連携強化。それぞれの競技の主催団体に、中継のリスクや安全管理体制をこれまで以上に丁寧にご説明し、団体からもご要望を承って、現場のスタッフに周知していく。以上の4点に、早急に取り組む。

(詳細は報道資料を参照)